'07 信州昆虫資料館　館報 No 2

月	日	内　　容
4	21（日）	開館
5	13（日）	午前１０時～　自然観察会　（お昼はご持参ください） 午後１時～　コンサート ２時～　マダラヤンマ保護研究会設立総会 （マダラヤンマは上田市天然記念物のトンボです） 「庭によぼう　カブト虫クワガタ虫」出版記念会 パーティー　参加費５００円（本を含む）
6	17（日）	午前１０時～　自然観察会 午後１時～　茅野實氏講演「虫と地球と私」 （県環境保全協会会長、日本昆虫協会長野支部長） お茶会　ギターコンサート（馬島昇さん）
7	8（日）	午前１０時～　自然観察会 午後１時～　昆虫の勉強会 他
8	1（水）	山田靖氏の昆虫画ギャラリー開設
	毎週 金・土	午後８時～　夜間昆虫観察会と星空を観る会 恒例「ライトトラップに集まる虫」を観察しよう
	12（日）	午後１時～　山田靖昆虫ギャラリー鑑賞会 [描いてみよう！虫や花] 紙と色鉛筆を用意しますが、お好きな画材をお持ちください
9	9（日）	午前１０時～　十観山登山　館８合目から頂上を目指します 歩きながら、花や虫の観察をします
10	14（日）	午前１０時～　自然観察会 午後１時～　昆虫の勉強会 他
11	11（日）	午前１０時～　ありがとう会 館内外のお掃除／ランチパーティー

・観察会にはインストラクターの先生方が一緒に歩きます

・雨天時は館内での勉強会となります

・お昼はご持参下さい

現状と展望

信州昆虫資料館代表　小川原辰雄

多数支援者のご協力ご支持を得て当館も開設四年目を迎えることとなった。この機会に現況をご報告するとともに将来の展望について触れてみたい。昨年度の入館者は４月から１１月までに３０００人を超えた。講演会、館周辺での採集会、夜間観察会も好評を頂いたものと思っている。

開設に当たっては日本昆虫協会長野支部の会員から多数の標本を提供いただいたことに更めて感謝の意を表したい。また一昨年は清水常夫先生採集のハエ類標本、昨年は清水明先生採集のアブ類の標本を加えることができた。ともに類を見ない貴重な標本であり、提供されたご遺族のご厚志に報いるべく管理展覧に当たりたい。さらに横浜市在住の小泉眞人氏からはモルフォチョウ等華麗な外国産蝶類標本多数の提供を受け、これまでとは一味違った幻想の世界に遊んで頂けることを幸運に思っている。嘗て青木村の別荘団地に住まわれたこともある岡本裕之氏からも、多数蝶類標本の提供を受けた。仲介の労をとられた大泉武氏のご協力に感謝したい。日本蜻蛉学会前会長枝重夫博士寄贈のトンボの標本や、青木村の沓掛正一氏が任地の東南アジアでもとめた昆虫標本、同村鈴木繁男氏採集のチョウの標本と併せてご覧頂きたい。近い将来には山口県在住の山田靖氏の昆虫画を館内ギャラリーに展覧出来るものと思う。山田氏は８８歳のご高齢であるが農業のかたわら昆虫を描き続けた異色の人であり、その作品は４００を超えている。その中から５０点ほどを常設にし、適宜入れ替えていくので、ご期待いただきたい。

旧武石村在住の宮原文男氏によるクワガタムシ・カブトムシの著書を、館の編集により発行する。幼い頃から地元の自然の中で生き、観察を重ねて来られた氏の独自な発想を盛り込んだユニークな本となろう。５月中旬に刊行すべく作業を進めている。

ファーブル昆虫記が出版されてから１００年に近い歳月が過ぎた。当館でもファーブルの原本フランス語の復刻版を入手し図書室に備えたので閲覧いただくのも一興かと思う。

昆虫学―特に応用昆虫学の将来は多彩であり、最近では天蚕が冬眠を続けるために体内で分泌する物質に癌細胞の増殖を抑える作用があるとの報道もあり、これからは農業に止まらず医学分野でも、従来の衛生昆虫とは異質の分子生物学的研究も期待され興味は尽きないが、矢張りその基礎をなすものは分類であり、地道な研究の集積であろう。研究者の要望にもこたえ得る標本の整備と文献の蒐集に努めて参りたい。古今にわたる昆虫文献の自由な閲覧こそ当館の使命と考えている。日本昆虫学会雑誌を始めとする文献のバックナンバーについては、顧問安藤裕博士の多大なご貢献をも特記しておきたい。

近年は絶滅の危機にある昆虫類が屢々報道されているが近郷においてはマダラヤンマがその例と言える。これらの種の保存に精力的に取り組んでいる個人、団体（下之郷水土里まもり隊・富士山水土里会）もある。当館も有志の皆さんと共にマダラヤンマ保護研究会の設立に加わった。連携をとりながら、保護の意味と必要性について考えてみたい。

現在上小森林組合による木材の伐採作業が行われており、館への道路沿いが明るくなりつつある。まだしばらくの間は不便をおかけすることになるが、作業の現場まで登って頂くと通行可能にしてもらえる。あるいは青木峠（Ｒ１４３）の方から迂回することも出来る。山道なので、充分注意していただきたい。ご来館をお待ちして簡単ながら御禮を兼ねてご報告としたい。

四周年目を迎えました

信州昆虫資料館顧問　安藤　裕

私達の昆虫資料館はこの四月から四年目に入ります。これまでの三年間は試行錯誤の連続でしたが、小川原代表、野原主事と館の発展に協力する方々の努力で、どうやら館の個性あるスタイルが出来上がったように思います。今後はスタイルの確立とアカデミックな館の命である収蔵標本と関係文献、資料の充実が課題となります。館の初めての出版物も今年刊行されます（庭に呼ぼう・カブト虫・クワガタ虫　著者　宮原文男）。宮原氏の長年の観察や経験が織り交ぜられた、ユニークでたのしい本になります。この本を仕上げるために、館をあげての作業が続いたことを特筆しておきたいと思います。

昨年度は、上田市の故清水明氏が半生をかけて収集された東信地方のアブ類標本の大コレクションを展示することが出来ました。これは、ご家族のご好意により実現したものですが、さらに有難かったことは、清水氏が収集された昆虫学、生態学、応用動物学など数百点に及ぶ学術書と学会誌も共に資料館に収められ、図書室での閲覧が可能になったことです。このアブの標本は、既に展示されている故清水常夫氏の上小地域のハエ類標本と共に長野県内のみでなく、全国的に見ても大層貴重な学術標本で、本館の誇りとなるものです。また、この他にも横浜在住の小泉眞人工学博士、岡本裕之氏のご好意で、多くの外国種を含むチョウ類の見事な標本が寄贈され、春から展示されます。さらに昆虫関係資料としては、岩国市にお住まいの山田靖氏（八十八歳）が長年に亘り描きためられたチョウ・ガなどの写生画の力作四百余点も寄贈され、展示の準備が進行中です。

昨年、心象画家でもある野原主事の作品展が資料館で開かれ、好評でしたが、この山田氏の作品展により、館のギャラリー性が高められることを期待しております。

私達の信州昆虫資料館は、小川原代表のかねてからの構想の博物館としての機能と、昆虫文化資料の収蔵の二つの機能を兼ね備えた施設で、規模は大きくはありませんが従来の博物館とは全く違う性格のものです。例えば館のロビーにグランドピアノが据えられており、度々コンサートも開かれております。美術も音楽も共存するユニークなスタイルの信州昆虫資料館が、多くの人々に愛されることを心から念じております。

～～*　**新刊ニュース**　*～*～*

★信州昆虫資料館シリーズ（一）
「庭に呼ぼう　カブト虫クワガタ虫」
安藤裕　監修　　宮原文男著
発行人　　小川原辰雄
(500円)
お問い合わせ　　信州昆虫資料館

★　写真集「オオムラサキ」
栗田貞多男　著
本年５月信濃毎日新聞社から出版されました。里山と国蝶のさまざまな姿を愉しめます（５０００円）
☆館の庭先に発生するオオムラサキは、栗田氏からの卵を育てたものです☆

ファーブルと一石路

青木村郷土美術館館長　櫻田義文

大正 13 年 4 月 23 日

神田の古本屋でアンリー・ファーブルの「自然科学の話・大杉栄訳」を見つけ１冊買う。これはもう絶版になるものなので買い物である。

4 月 29 日

比嘉さん（改造社の同僚）にファーブルの昆虫記を借りる。面白い、実に面白い、校正をしながら毒虫のところを読む。」

5 月 1 日

メーデーである。神田の古本屋を漁ってファーブルの昆虫記を入手。

6 月 1 日

午前中家の庭でアリの巣を壊したり、彼らの復旧作業を見たりして半日遊ぶ。（栗林一石路　大正１３年日記より　青木村郷土美術館蔵）

まるでファーブルが乗り移ったかのように、蟻たちが大騒ぎで卵を運んだり巣を治したりするようすを、いくらか自虐的な気持ちと好奇心で見凝める一石路。武蔵小山の借家の、わずかばかりの庭で興じる姿、彼は詩人でもある。

蟻も出ていてものはこぶ野の春
たわらの虫を頃さんと蟻らせんねん

栗林一石路、本名農夫（たみお）は明治２７年青木村細谷に生まれ、父の影響で子供の頃から俳句を作っていた。高等小学校を出て田畑６反歩の家督を継ぎ、明治末には萩原井泉水が主宰する自由律俳句の「層雲」と出会い、同人となった。青木学校同窓会報に投稿したり、大正１０年創刊の「青木時報」では、初代の編集主任として活躍。その年に青木小学校教員であった斉藤たけじ（塩田十人出身）と恋愛結婚し、大正１２年３月志を胸に妻と共に上京する。９月１日、関東大震災に遭う。「それまでの東京はがっちりと組織化されていて、学歴もないものが入り込む隙もないくらいだったが、大震災がその組織を壊してくれて入り込む隙ができたのだ」と、長男に言っている（長男一路氏談）。おかげで一石路は、大正１２年１１月改造社横関愛蔵（塩田五加出身、改造社編集長）の伝手で入社する。一方では「層雲」の同人として活躍し、４月には一路が生まれている。

時代は大正デモクラシー、ちょっと明るい日射しがさした時代でもあった。マルキシズム、アナーキズムなどの思想も入ってきたし、自然科学も欧米からどんどん入ってくる。そのなかでも「科学の詩人」と呼ばれるファーブルの「昆虫記」は、それまでの無味乾燥な科学と違って詩情あふれるもので多くの読者を引きつけた。一石路もその中のひとりだった。このとき一石路が手に入れたのは、大正１１年叢文社から発行された「昆虫記第一巻」だった。（信州昆虫資料館には、昭和３年第７刷版がある。また同館にはファーブルの昆虫記が全巻揃っている）その１巻だけが大杉栄の訳になる。

・・大正１１年８月１２日　「訳者の序」・・

「（前略）実は４～５年前からファーブルを読みたいと思っていたが、しばらく獄中生活をしなかったのでその暇がなかった。（中略）３ヶ月間、３畳ばかりの独房に押し込められながら読もうと思ってファーブルなど２０冊ばかり抱えて中野の多摩監獄へ行った。入るとすぐにファーブルの昆虫記の英訳書が、丸善の新着本の中にあったと５冊差し入れになった（中略）ようやくこの一巻を翻訳し終わった。第二巻は本年中に終わりたい予定である」と書いているが、この一年後、大杉は震災直後の混乱の中で、妻野枝、甥とともに憲兵大尉甘粕正彦に虐殺されてしまったため、予定は変更せざるを得ず、二巻以降は椎名其二が翻訳している。

一石路とファーブルの出会いが、このあと

どう展開したかは大正１４年以後の日記が美術館にないのでわからない。一石路の膨大な俳句の中から読み取るか、神奈川近代美術館にある１５００点にのぼる「一石路資料」を紐解いていくかになるが、その作業はまだできていない。

１９６１年に亡くなった栗林一石路の原稿、写真、日記、俳句メモなどの遺品が、昨年ご遺族より寄贈され閲覧しています。また、「一石路を語る会」を月に一回開いています。関心のある方はお問い合わせください。

（青木村郷土美術館　0269-49-3838）

虫の世界と

信州昆虫資料館協力員　奥村和子

「なついろ」と書かれたパンフレットの表紙には捕虫網の挿絵。　ながのアート万博２００６は　７月２日から８月５日まで長野市街とその周辺２０数箇所を会場として多彩な展示が繰り広げられました。　中でも異彩を放っていたのが「野原未知作品展」でしょう。　長野市から東に数十キロの山懐に抱かれる信州昆虫資料館を会場としてまさに万緑の中で開かれたのですから。ながのアート万博総合パンフレットの表紙に図らずも象徴されていたかのように。

資料館の主事として開館以来の業務一切を取りまとめてきた野原さんが画家としての本来の姿を久々に提示した個展でした。二階会議室に常設展示の７メートルに及ぶ大作「風をはらんで」はもとより和室の床の間にあまるほどの「宙(SORA)」. . 更に階下の研修室からホールにかけてを展示空間としたばかりではありません。　ホールの外に広がる真夏の林。　その木々の間を深紅に黄金に紺碧に彩るのは公開制作によるインプロヴィゼーション。　宇宙との同心円を常に求め続けているかのような一点なのでした。

蝶の楽園を夢見つつオオムラサキを育て見学の子供たちが描いたクワガタやセミの絵の一点をもおろそかに扱わぬ　そうした野原さんの真情は山口県に住む山田靖さんを動かしました。全幅の信頼を彼女に寄せた高齢の山田さんは長年描きためた自作の昆虫画を遠国　信州の昆虫資料館に寄託することに決めたのです。かけがえのない水彩画の保全展示に向けて万全の策が講じられることになりました。

開館４年目に入ります。　館のすべてに関わって多忙な野原さんにみなさまのお力を今年もよろしくお貸しくださいますよう。「人虫共棲」の境涯が　より豊かに得られんことを願ってやみません。(2007.4.18)

＜風をはらんで ～風源～＞

菅平峰の原斜面に風力発電１１基
？？？？？？？？？？？？
国立公園の山岳傾斜地に大きな穴を11個掘り、巨大な回転翼が回る施設の計画があるそうです。虫・花・鳥動物たちや、人間にとって、さまざまな犠牲も予想されますが、施設の必要性とメリットは？？

循環型社会

信州昆虫資料館協力研究員　栗原崇至

ここ最近よく耳にする言葉に「リユース」「リデュース」「リサイクル」があります。人間界ではようやく今頃になってこのようなことを言うようになってきましたが、自然界ではごく当たり前のこととして太古の昔から営まれてきました。この「循環型社会」について身近なところで虫たちの活躍を見ることができます。私は食糞性コガネムシ（糞虫）にとても興味があり、毎年糞虫を調べていますが、必ず１年に１度は訪れる場所があります。皆さんも１度は訪問されたことがあるかと思いますが、それは奈良県にあるあまりにも有名な奈良公園です。私はここで、国宝の社寺を見学に行くのではなく、足元で大活躍する多数の糞虫達を見ることが目的です。さて、先ほどの循環型社会ですが、この奈良公園というところは太古の昔より今も変わらず繰り返されていることがあります。ここでは野生の鹿が数多く見受けられます。当然、観光客の方向けに「鹿せんべい」など売られており、街中でも鹿を見ることができます。そうするとごく当たり前のように、そこらじゅうが糞だらけになります。しかし、この公園では糞を掃除している人を見ることがないのです。

＜糞を奪い合うルリセンチ＞

そう、ここに糞虫と鹿の重要な関係があったのです。ここでは数多くの種類の糞虫をみることができます。その中でも代表的なのがオオセンチコガネ（＝ルリセンチコガネ）です。この公園では普通に見かけることができます。一般的にこの種は牧場などでよく見かけるのですが、ここに限っては瑠璃色の体を太陽の光で輝かせながら沢山飛翔しています。ここの糞虫達は鹿の糞を餌としています。また、産卵などのために土中に運び込みます。そうしてこの公園の糞はおびただしい数の糞虫達がすべて処理してしまいます。土中に運び込まれた糞は、そのまま公園の芝生の肥料と化すものも多く、その栄養を豊富に受け、芝が育ちます。そうした芝をまた鹿が食べて糞をします。昔から繰り返してきた何一つ無駄の無い循環型社会を築き上げているのです。近年牧場などでもめっきり糞虫の数が少なくなりました。これは牛などにつく寄生虫を駆除するために撒く薬のせいで、糞虫が棲めなくなっています。最近の牧場は糞虫達に処理されなくなった糞が沢山目につきます。人間が介在することでこうした自然の連鎖・リサイクルまでも切り裂いてしまい、昆虫達もその役目を失い絶滅していくというなんとも悲しい現実があります。もう少し昆虫達を見習わなくてはなりません。

＜春日の森の鹿たち＞

虫の僕（しもべ）

主事　野原未知

昨年４月下旬から５月は、１昨年秋に村の岩下さんからいただいて、館内で越冬したヒメギフチョウの蛹が羽化。しばしロビーやスタッフルームで舞い遊ばせて放蝶。放蝶までの時間差の理由は、吸蜜するカタクリやサクラの開花と、産卵するウスバサイシンやカンアオイの葉（食草）の成長を待つためでした。

放蝶までの食事はカルピス（村の鈴木さんに教わりました）。手のひらにカルピスを含ませたティッシュを乗せておくと、香りに寄ってきて、クルクル巻かれた舌をのばし、おいしそうに吸います。髪にも肩にも止まり、和やかな交流をしていました。同時に庭先の桜やカタクリに早く咲けよと声を掛け、食草たちには大きくなれよと手を合わせ、花芽たちはぎりぎりに間に合わせてくれました。ヒメギフたちはランデブーののち、葉裏に真珠の赤ちゃんみたいな卵をいっぱい産んでくれて！！小さな黒い毛虫がぞろぞろ出てきて、もくもく葉を食べ大きな毛虫になりました。秋にはすっかり見えなくなって、どこぞの洞や木陰でサナギになって越冬に入りました。たしかにそこまで見届けたつもりでしたので、今年の春は自然の中での羽化の様子を愉しみに観察していたのですが・・・。

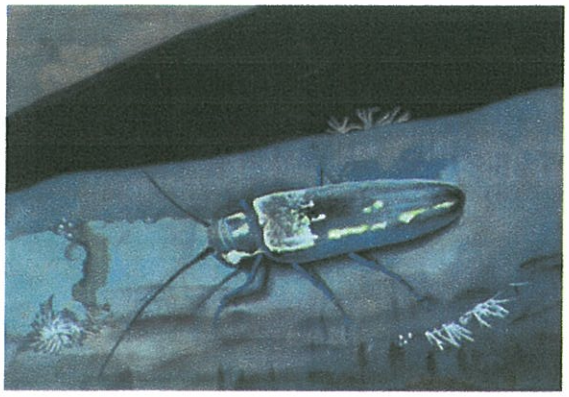
また、こんな調子でオオムラサキチョウも丸３年羽化の様子を観察してきました。寒いの暑いの、食草の成長具合から代替食の心配まで、まさに蝶よ花よの日々でしたが、次々と外界に出てくるさまざまな虫達との付き合いの心愉しさは言い尽くせるものではなく、また今年も！！と、庭先を毎日歩いていたのですが・・・本年春、ついにヒメギフの自然羽化はなく、おまけにオオムラサキも、今年はエノキに幼虫が登っているのを確認出来ておりません。「お互い、生きものだものねえ」と、つくづく里山とはいえ１０００㍍地帯の自然の理を見た気がします。

夏はライトトラップに集まる虫を観察したり、夜の野を歩いて、頭上にまたたく星を見上げ、足元に這う虫探しと、愉しみました。別所温泉の旅館からバスで夜間ツアーに来られる方々は、ほとんど都会に住む皆さんでした。恐る恐る闇の中に足を踏み入れるのですが、闇を共有する者同士の不思議な一体感が生まれます。人も虫も同じ時間軸のなかで呼吸していることの実体験はなかなかのもの。ライトトラップに集まるのは、主に蛾類です。ツノトンボやカブト虫も来ました。カゲロウの仲間、コガネムシの仲間もいました。それらの多彩な色やデザインに、虫嫌いだという女性も夢中になっていました。今年の夏も楽しみです。

今年の春先、近所の方が薪割りしたらこんなにいたからと、シロスジカミキリの成虫が沢山うずくまっている薪を持ってきて下さいました。さっそくロビーに展示してあります。また、それらを標本にしてくださった栗原さんがカブトムシの幼虫をたくさんのタッパーに入れてきてくださいました。

大きいものはもう親指ほどになっております。これらもロビーにいます。

今夏も、館内外小さな虫達との日々になりそうです。



＜シロスジカミキリ　山田靖 画＞

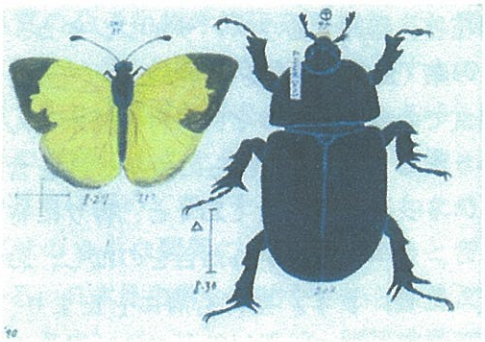
山田 靖 昆虫画ギャラリー

＜山田　靖さん＞

山田靖さん（８８歳）は、山口県岩国市周東町に生まれ育ち、現在も在住されています。

農業の傍ら描きためて来られた虫たちの絵からは、生きものへの慈愛すら感じられます。多くは語らぬ山田さんですが、素朴な線や彩色された画面からは、野に在るものの小さな声が聴こえてくるようです。

館内に常設ギャラリーを作ることになりました。８月１日にはオープンすべく、空き部屋の内装工事が進行中です。オープン前にもういちど岩国を訪ねる予定ですが、岩国の皆さんと青木村の皆さん、全国の皆さんに応援していただけたらどんなに幸せなことかと思います。



＜キチョウとカブトムシ　山田靖 画＞

後記　（野原）

本年、春先に小川原先生のお母さまが１００歳でご逝去されました。お元気になって館にお見えになられることを願っておりましたが、とても残念です。

５月１３日のオープニングイベントは、４９日の法要にあたります。

館一同、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

開館４年目、毎年冬期閉館ののち新しい春を迎えます。今年も桜と芽吹きの美しい季節の中で、オープニングを迎えられることを感謝し、虫を通してより深く世界を見ていける館になれるようお手伝いをさせていただきます。個人的には、真っ白なキャンバスをこよなく愛するものですが、ものいわぬ虫たちとのつきあいも、こころの自由な愉しさをもたらしてくれます。遊びにおでかけくださいね。

信州昆虫資料館

〒386-1601　長野県小県郡青木村田沢１８７６－６

代表：　小川原 辰雄

TEL：0268－37－3988　FAX：0268－37－3964

URL：http://www13.plala.or.jp/kontyu/